

第五十二回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 一百九十四句

選者 墓目良雨

特選

法螺貝の鳴るや斑雪の奥の院 青梅市 津布久信雄
雷激す騎乗重忠たぢろがず 日の出町 渡邊敏雄
神門も磴もはやばや掃納 立川市 堀江孝晴

秀逸

夏空に御嶽神社の三百段 西東京市 ちもも
満タンの灯油や御師の冬館 宮城野原郡 我妻 遼
ももんがの飛びたる御岳緑の夜 川崎登喜郡 柳田敦子
暑き日も顔色変えぬ大口真神 西東京市 度刀人十

佳作

じゅうやくくば毛虫のポロにまた会えた 大田区 泉水瑞子
己年同志嫁と仲良く初詣 世田谷区 武田和子
百年の茶屋のぬくもり千代の春 狹山市 松本さみ枝
初明り都の天にほんのりと 目黒区 大河裕子
山の恋歌に預けて赤とんぼ 練馬区 川村能正

選者 吟 宝船御岳山は雲の海の上

第五十三回 奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、作品は指定用紙にて投句箱へ
(郵送等直接の受付は致しません)
一、締切り 令和八年一月十五日
一、発表 令和八年三月中旬

奉納俳句選評

法螺貝の鳴るや斑雪の奥の院 津布久信雄

奥の院は本殿に祀る神のその布に当たる神を祀るところ。その神社の秘中の秘の神さまを祀るのだから。雪深い時期は中々近づけないが春が近づくとつれづれ斑雪が見えるようになる。それが雪道には違ひなく御師のような健脚の人以外に近づくとが難しい。奥の院に法螺貝が鳴るようになり春が近づいてきたことを感じた作者である。

雷激す騎乗重忠たぢろがず 渡邊敏雄

山の雷は激しいものだろう。畠山重忠の騎馬像を見れば激しい雷にも関わらず乱れる様子が見えない。像だから当たり前なのだが、ここに作者は重忠の冷静沈着な人物像を重ねたのだ。歴史上の人物と遊ぶ作者の心意気が一句に結実した。神社は歴史上の人物を思い起させるに相応しい舞台を私たちに提供してくれる貴重な場である。

神門も磴もはやばや掃納 堀江孝晴

神社の大晦日の掃納の光景。家庭ならこの後ゆつくり過ごす時間があるかも知れないが、初詣を迎える神社にはそんな余裕は無い。早々と掃納して初詣の準備にからなければならぬ。「はやばや」に迫迫した時間をやり繰りする神社のありようが出ていて素晴らしい。神門、磴と具体的に写生している点もよい。

夏空に御嶽神社の三百段 ちもも

暑い時に上る御嶽神社は石段が三段ある事しか記憶に残っていないのかもしれない。苦しい時に参拝して得られたある夏の記憶。

満タンの灯油や御師の冬館 我妻 遼

御岳山頂にある御師の家の冬支度を描く。山頂までの山道を車で案内していただいたことがあるが、あの急坂を期に車を上り下りする困難をこの句は暗示している。山道を走れるうちに灯油を満タンにする生活の知恵の現れたと思った。

ももんがの飛びたる御岳緑の夜 柳田敦子

ももんがは冬の季節になっているが、御岳山では夏の夜でも自由にももんがが飛んでいる。森の匂がしてくるようだ。

暑き日も顔色変えぬ大口真神 度刀人十

大口真神(おいぬさま)伝説の御嶽神社ならではの句。狼を「おいぬさま」と親しく呼び慣わして神前を守る狼だから「おいぬさま」像の優しい姿に感入して、暑い日に顔色を変えないで頑張っていると思いを寄せる。

御嶽神社あれこれ

『御岳山の屋号・苗字・名前』

榎瀬宜 鞆矢 嘉史

「金丹」の講社の太々神楽奏上は十一時からです
「直宿は早也くんちイイさです」「ミナミさんが日供を持ってきました」「山の動植物については神田さんに教わる」といよいよ、神社ではこのような会話が交わられています。

「金丹」「神田」は苗字、「早也」は名前です。「アイ」「ミナミ」は女性の名前にも見えますが、アクセントが異なります。実はこれらは御岳山の各家の「屋号(家号)」の例です。

現在は商家や歌舞伎役者などの屋号がよく知られています。御岳山の各商店の屋号は、ケールカー御岳山駅前(富士峰軒・美支店)神社鳥居前の(鳥屋・駒鳥売店・千本屋・紅葉屋)です。

ただし、元々は屋号とは村落の各家の通称で「屋敷名」ともいいます。御岳山の御師たちにも苗字とは別に屋号があります(屋号と苗字が同じ御師もいます)。御師の車や屋号に由来する名前の宿坊もあれば、苗字・屋号とは別の宿坊名を称する御師もいます。

御嶽講があるようなくちからの集落では、同じ苗字の家が多いため、かつては屋号で呼び合っていました。歌舞伎役者同士では、例えば「播磨屋のおじさま」「中村屋のおいさま」と、現在も屋号で呼ぶようです。御岳山でも苗字・名前と屋号を用いて呼び合う慣習が江戸時代から続いています。

天保五年(一八三四)刊行の「御嶽管笠」は、秩父郡出身の国学者藤藤彦が、江戸日本橋から御岳山までの道中を紹介した書です。御岳山上に至ると、神主・御師各家を屋号と苗字、名前を駆使して順番に叙述していきます。

ます、「いらかならべし家々は誰が御師やらん黒田木」

黒田木工(現在は黒田耕)、屋号「大西」宿坊丸山荘です(以降も天保五年現在の御師名、屋号、宿坊名の順に記します。江戸時代の神職の名前の多くは、朝廷の役所名(木工は木工意)や旧屋名でした。

続けて「ひだり橋本・鞆矢の、えびらになびく女祝高名の下は権正」島中なる秋山の、「橋本」は橋本玄蕃(傳)・橋本・静山荘。「鞆矢」は鞆矢式部(正)・表・うつぼや荘。「片柳」は片柳将監(光輝)となり登奈利荘(高名)は高名監物(秀樹)・あい・高名荘。「権正」は片柳権頭(政光)・前片・片柳荘。「秋山」は秋山造酒(佳久)・秋山(畑中)・秋山荘です。

表参道を進み、「左近の桜咲みだれ 杉の枝の枝げく 登りは掃部」兵部・勘解由をうち過ぎて、「新屋は内匠」。「左近」は須崎左近(浩文)・魚屋「林」は林大膳。「内匠」は須崎兵部(時彦)・千本屋「勘解由」は片柳勘解由(俊生)・不地場・藤本荘。「新屋」は片柳内匠(至弘)・新家・山樂荘です。

坂道を登りきると、「幹木 音も清く 宮庭に近き嶋崎や みおろし家は馬場」二軒 大学・求馬 南下」大柄民部上の句。左京の下は青蓮寺(掃部町)。「幹木」は鈴木伊織(伊織)・鈴木・山香荘。「嶋崎」は嶋崎主計(絶家)・井の上。「大学」は馬場大学(慶太郎)・西・駒鳥山荘。「求馬」は馬場主馬(徳)・香坊・春間。「南下」は片柳内書(他出)現在は工房「塗師屋秋道」が所在。南下、「大柄民部」は須崎内蔵(他出)・大木戸、上の台は片柳左京(左京)・上の台「掃部」は片柳織部(茂)・南・南山荘です。

裏参道へ戻って神社へ向かいます。「角は蔵人 原馬や 水師采女の井戸端をのぼる坂所中務 荷前を込し俵坊」。「角」は須崎蔵人(直洋)・角・嶺雲荘。「原馬」は原島頼母(二田)・原島・原島荘。「井戸端」は馬場采女(克巳)・井戸端・東馬場。「坂所」は片柳中務(他出)・さかど。「俵坊」は鞆矢市正(嘉史)・俵坊です。



「屋敷・地面・家作」交換説文 (上:久保田英明氏所蔵) (下:鈴木伊織氏所蔵)